321
394

日曜學校叢書
第二編

日曜學校諸問題

海老澤亮著

日本日曜學校協會發行

始

325-394

帝國圖書館藏

日曜學校諸問題

大正
7. 7. 22
內交

序言

我邦基督教界に於ける日曜學校問題は近年幾多の同主義者により叫ばれ來つて、一般に注意を喚起せられた、今後更に此方面の興味は增進せられ、幾多の專門家が之に努力するであらう、斯くて健全なる神國發展の實を擧げ得べしと信じて大に意を强ふすべきものである。

されば此方面に於ける關係者の或人々は、最早や研究奬勵の時代を過ぎて、實施期に入り居る事を感ぜられるであらう。斯かる時期に到つて本書を出版するは稍々時勢遲れの觀がある。

日曜學校と教會

海老澤　亮

(一) 訓育の使命

個人の救濟に出發して社會の救濟に及ぼし、品格の建設に基づきて天國の建設に達せんとするは、之れ則ち基督の理想にして、また吾人の終局的希望である。然れども此最大目的を達せんが爲に、吾人は先づ基督教が深く其根底を個人の品格に据ふるにあらざる限りは、縱令如何に一時天下を風靡するの概あるとも、一陣の秋風紅葉を拂ふて、また何處より來り何處へ往くを知らざるものゝ如く、何等永久の意義ある教化の實を擧げ得べきものに非るを信ずる。然り天國の建設は品格の建設に基づ

き社會の教化は個人格の訓育に俟つべきものである。

然して基督教界數世紀に亘る宗教的經驗と、科學的知識の進歩とは、爰に基督教的品格（クリスチャンキャラクター）の建設が組織的の訓育に依てのみ、其目的を達し得べきものなる結論に到達せしめ、宗教に於ける教育的理想の發達は、近代著明の一現象となり、今尚リバイバル運動の形式に則る教會と雖も、既に著るしく此趨勢に感化せられつゝあるを見る。

斯かる見地より之を觀ずれば、教會は則ち德性上の大學であつて、傳道とは則ち其學生徴募の擧を意味し、牧會とは則ち其訓育の別名なりといふ事が出來る。而して此大學に收容せらるゝ學生の多くは、德性上の素養甚だ淺くして、其秩序ある訓育を受けし者に至つては、曉天の殘星も啻ならぬ有樣なるを見るに及び、理想の精神教育は幼稚園より小學中學を併置するに非んば、遂に施す可らざるに思ひ到り、爰に基督教會は

自然兒童の訓育に多大の興味を感ぜざる能はざるに至る所以である。

夫れ遺傳の感化が品格の上に及ぼす影響の多大なるものあるは、必ずしも識者を俟つて後始めて知るべき問題ではない。基督の人格は千餘年に亘る猶太の歴史的背景を控えてゐた。彼の品性人格に達せんとする者、如何ゞ短時日にして之を能くすべき。吾等が幾多の東洋的感化を具有して、純然たる基督教的品格（クリスチャンキャラクター）を建設せんが爲に苦悶を要するもの多大なる實驗に徴し、人格の果實は一世紀の後に結ぶべきものたるを信ずるに至るも亦當然である。

されば基督教界は今や將に其の根本問題たる世界教化の爲に、百年の計を立てゝ兒童訓育をなすべき時機に到達したといはねばならぬ、由來教會の職能（フンクション）は之を傳道と教育との兩者に區別せらるゝ。而して何れの教會と雖も傳道の方面に、競ふて其力を致すものあるは吾等之を知る。而

も夫すら既に教育的傾向を要求する現代に於て、教育の方面に關し何等の考慮を廻らす者なきは、嗚呼之れ現代教會の一大缺陷ではない乎。國家は第二の國民を養成せんとして國民教育に汲々たり、國家的觀念の素養なき者が國家の敵たらん事を惧るゝからである。教會は第二の信徒を養成せんが爲に、當に宗教的訓育を施さゞる可らず、之を缺ける者が教會の柱石となり、健全なる信徒となるべしとは思はれないからである。

兒童の宗教的訓育が直に其實効を現はし以て受洗者を出すに至らざる理由により、之を等閑視するは思慮ある教化の方法ではない。彼等の單純なる軟かき頭腦に浸潤せる教の種は、所謂能く耕されたる良田に落ちしものと一班、必ず何時しか百倍の果實を結ぶべきものである。

我國に於て中年以後悔改の實を示せる者と雖も、今や其大多數は曾て少年時代に日曜學校の門をくぐりし者たるを思へば、傳道的運動の効果

も亦、訓育事業に俟つものたるや瞭かである。故に曰く將來の信仰復興運動は當に新らしき樣式を取つて現はれ來らねばならぬと。

又現在の日曜學校を以て直に此事業を評價するは、尙兒童を捕へて直に大人としての價値如何を論評するが如く、決して正鵠を得たる所以ではない、之を如何なる點にまで改善し發達せしめて其價値を發揮せしむべきやは考究を要する問題である。若し夫れ設備の改善と教職員の養成とが、稍々見るべき進歩を示し來らば、之は則ち搖籃の乳兒より青春の健兒に至る迄、順次其心理的特徴に應ずる訓育を施し得べきものにして、殊に不絶人々に聖書研究の刺激を與ふる唯一の機關たるべく、其價値や決して疑ふ可らざるものあるに至るであらう。

基督教界全般より之を論ずれば、そが兒童の訓育を忘れて、只管悔改者をのみ獲得せんとする者は、猶根に培はずして果實を取らんとし、播

かざる處より苅らんとする者たるを免れない。

併し若し之が教會の殆んど唯一の教育機關であり、且永遠の傳道策でありとするならば、教會は當然其責を負はねばならぬ譯である。而して日曜學校本來の性質上教會が之に冷淡なる事は實に基督教界に於ける一大不思議といはねばならぬ。

(二) 學校の經費

各教會の日曜學校當事者が皆均しく訴ふる處は「教會の無頓着なること」であつて、大多數は其經費をすら教會より支出するものなく、甚だしきに至りては、經費は校長の自辨なりといふものあり、以て如何に我が邦の日曜學校事業が未だ不完全なるかを示すに足る。吾等を以てすれば日曜學校の經費の如きは教會の經常費として豫算に編入せられざる可

らざる性質のものである。不定の收入で間に合せ居る日曜學校が發展の見込なきはいふ迄もない。教科書を使用し得ざる重なる理由は即ち教會の無頓着なるに起因してゐる。此問題の解決は主として牧師其人の此事業に對する態度より決定されるものである。

日曜學校生徒の献金を以て其經費に充つるが如きは、教育上戒むべき事である、由來日曜學校の理想は無報酬の教師が價なくして子女の訓育をなす事に存した、勿論發達の或時期に於ては有給教師も聘せられたが、愈々明瞭なる一特長は主に對する奉仕の念より教會員の献身的事業となつて居つた事である、生徒も亦金錢を以て教育に對し支拂をなすが如き思想を懷く事があつてはならぬ、又若し受くるカードの爲に此献金をなすといふが如き考を抱かしむるならば、之は奬勵にも教育にもならぬであらう。生徒の献金は他の善良なる目的の爲に生徒の意志に從ひ使

用すべきものであつて、日曜學校の經常費には決して之を支出すべからざるものである。

(三) 學校の準備

日曜學校教育を有効に且つ都合よく行はんが爲には、是非とも其準備をよくするの必要がある、而して之は當然教會が責任を以て考ふべき問題である。

第一に要するものは機會である、禮拜所を幕に依り區劃して教授するが如きは、餘りに原始的のやり方であつて、到底進歩せる日曜學校教育の理想を應用する事は出來ない、どうしても最近心理學の發達に依つて明示せられたる如く、日曜學校も生徒の發達的階段に順じて、其級別制度を採用する以上は、各級別々の教室を備へられねばならぬ、少くとも

特に教授中の音樂唱歌の必要ある幼稚科を隔離せる教室がなければならぬ。

今後會堂改築を企つる者は必づ先づ教會の一大事業たる日曜學校教育上の見地より設計せられなければならぬ、會堂の階下を校舍に充つる事も一方法ではあるが、而して禮拜所使用にまさる事素より數等ではあるが、そは或人のいひし如く矢張りデベースメントたるを免れない、理想的にいへば校舍は全く別に其目的の爲めにのみ建立せられたいものである。

次には教室内の設備である、總てが兒童の清新なる趣味を養成せしめ得る如く企てられ、且教授上の便益として少くとも各室に黑板地圖其他の要具を備へられねばならぬ、其ほか學校として備付を要するものは甚だ多い、兒童の趣味に適せるピアノ、或は愛校心の繫ぎとなるべき校

旗、又は兒童の訓育上の助となるべき少年文學を蒐めたる圖書、週間日に開放さるべき運動場及各種運動器具等望ましいものは幾らもある、教會は日曜學校當事者に此大事業を托しながら、其受くる不自由不完備に同情を表せぬやうな態度に在つてはならない。

尙教會の役員は單に口を以て其勞を謝するのみならず、時には日曜學校當事者を招き、以て其會員全班の得たる感謝の意を發表すべきである、教師は素より天よりの報酬のほか何者をも望まぬ者たるべき筈ではあるが、教會としては具體的に其謝意を發表するやうでなければならぬ。

日曜學校と牧師

海老澤　亮

日曜學校に對する牧師の責任

牧師は教會事業の主腦者なるを以て、彼の日曜學校に對する態度の如何は、實に其死活問題である。而して多數の日曜學校は其支柱たる牧師の共働を得難きが爲に、大なる損失を蒙りつゝある。博士ムリンス氏は之を左の四ヶ條を以て說明せられた。曰く

一、敵意ある牧師は其日曜學校を殺戮す

二、無頓着なる牧師は之を無能ならしむ

三、干渉好きの牧師は之を混亂せしむ

四、同情を以て協力する牧師は之を有効ならしむ

と、眞に至言なりといふべきである。

吾人は牧師にして此事業に敵意を有する者あるを聽かず、然れども無頓着の態度を取る者は決して尠少に非るとを信ずる。若し唯單に牧師が教會事業の一部なる子女の訓育に關して無頓着なりといはゞ、そは甚だ奇怪の事實と思はれやう。然れども斯かる態度を辯護すべき數多の理由はある、吾等をして今其數點を掲げ、而してそが果して此事業に關係せざる事の理由たり得べきや否やを檢せしめよ。

一、先づ多數の人々は自ら兒童の取扱に經驗を有せざるが爲め之に關係せずといふ。

けれども專門の教育家に非るよりは誰か最初より其經驗を有すべき。

經驗なき者は之を經驗し得べき者たるや論を俟たぬ「習ふより慣れよ!」とは此事に於て其眞なるを見る。而して直接兒童を取扱はざる事は以て直に此事業に無頓着なる事の理由とはならないのである。

二、最も忌むべきは此事業を以て一部少數の子供を好む連中に一任し置くべきものにして、牧師說教家の自ら關係すべき處にあらずとなす態度である。

多くの補助傳道者を有して各其專門の方面を擔任せしめ得べき大教會ならばいざ知らず、一教會一人の牧師にして尙且斯かる奇怪の論をなすとせば、そは驚くべき謬見たるを免れぬ、況んや如何なる大教會の牧師と雖も、直接自ら教育に參與せずとしても、其監督者としての責と、兒童の牧師たるの務とは、決して免る可らざるものなるに於てをやである。

三、或は又教會が斯かる働を要求せざるが爲に、其方面に力を盡し難

しとなす向もある。

之は眞に悲むべき教會の過失である。吾人は不幸にして屢々斯かる教會の存するを觀る、偶々牧師招聘の議起るや、彼等は其要求を述ぶるに到れり盡せるものがあつて、其容貌、音聲、經歷、辯舌より其妻、其健康、其事務的才能或は其社交的技倆までも之を云々するけれども、未だ曾て一言その日曜學校事業に對する興味と智識と熱心とに及ぶものあるを聽かない、斯くて彼等は其子女の宗教的訓育を念頭に浮べ得ざる程に憐むべき近視眼に罹り、牧師の此の方面の働を以て、徒らに餘分の事をなし居るものゝ如く思惟する者すら、間々之れあるを見る。然らば即ち牧師は斯かる誤謬と迷妄とを打破すべき責こそあれ、其制肘あるの故を以て之を避くるといふが如きは、實に憐むべき辯解に過ぎずといはねばならぬ。

四、更に屢々聽く處の辯解にして而も餘りに同情に過ぎたるものがある、即ち禮拜說教前日曜學校に參與するは、其神經を刺激する事多く、講壇の勢力を殺ぐといふのである。

然り吾等は其眞なるを知る、然れども牧師の此働の價値は、其損失を償ふて尙餘あるを信じて疑はない。多數の教會に於て常に教會活動の中心たる者、其多くは日曜學校に關係を有する者であつて、之等有爲なる會員の指導と奬勵とは、少くとも牧師自身の日曜學校に對する共働に依つて與へらるべきものである。人生は感激に在り、牧師にして若し前述の理由を以て之を避けんとせば、そは大に彼等の士氣を阻喪せしむる所以となり、彼等も亦將に言ふであらう。「然り有効なる說教には多くの勢力を要するであらう、而も有効なる聽聞にも亦多大の勢力を要する、牧師が日曜學校を避くると同じ理由を以て、既に禮拜前後多大の勢力を消

費したる我等も亦說教の聽聞を御免蒙らばならぬ」と。斯の如くにして彼等は遂に日曜學校事業其ものにも倦怠を覺え來つて、之を放棄するに至らんと火を看るよりも瞭かである。

五、或者は曰ふ興味を有せざるに非ずと雖も、日曜學校に於て牧師の爲すべき働の餘地がないと。

若し眞に興味と熱心とがあるならば、牧師の爲さねばならぬ事は甚だ其多きに過ぐるを感ずるに至るであらう。吾等は後に此點に論及すべきを以て爰に之を贅せず、唯それが根據なき辯解に過ぎずといふに止めて置かう。

六、最も善美なる辯解は、自ら働かんよりも人を働かするに若かず、而して牧師が之に參與するは徒らに干涉がましく思はるゝ嫌あれば之を放任すべしといふ事である。

人を働かさんことは實に牧師の理想となすべき處であらう。けれども牧師の興味を感ぜぬ處に働き吳るゝ特志家は甚だ少數なる事を記憶せねばならぬ、之れも亦彼が自身の興味を感ぜぬ無頓者の態度を辯護すべき理由とはならぬ。論者また干涉がましきを惧るゝといふ、吾等は牧師と敎師との間に一層親密なる共働の實あらん事を希ふ者である。又その可能なるを信ずる者である。若し眞に相互の職責を重んずるならば、牧師の出席は寧ろ大なる奬勵となつて彼等の熱誠を加へ、努力を增さしむべき筈のものであつて、其然らざるは那邊にか欠陷あることを示すのではなからうか。

* * *

要之牧師の務は飽迄も聖書と人間とに關與する者、敎師としての彼は人間に向つて聖書の說明をなさゞる可らず、說敎者としての彼は之を敷

衍せざる可らず、指導者としての彼は之を推薦せざる可らず、監督者としての彼は之が果して誤なく敎へられ居るや否やを見ざる可らず、牧者としての彼は其羊が能く此生命の糧を給せられて消化し居るや否やを知らざる可らず、人の僕としての彼は、之が敎授の任に當る人々の援手とならざる可らず、何れの點より之を考ふるも牧師が日曜學校に全然無關係たり得べき理由の發見せられざるのみならず、そは却つて根本的に彼の管理と指導とを要する性質のものたる事が瞭かである。

斯かる重要にして而も將來ある事業の攻究を顧みないのは、牧職に在る者の大なる罪たるを免れぬ、牧師が直接兒童の敎育に當るべきものなるや否やは自ら第二の問題である。唯彼が敎會の主腦者として宗敎的訓育の事に關する指導者たり管理者たる以上、日曜學校に對する責は全然彼の擔はざる可らざるものたるや言を俟たぬ、更に切言すれば、思想や

修養や活動や辯論の方面に間然する處なき好箇の牧師たりとも、唯一點兒童の宗敎的訓育に關し更に興趣を感せずといふ者あらば、彼は尙ほ確かに最も重大なる一つを缺ける者であらう。何となれば秩序ある聖書研究の好箇の機關に對して無頓着なりといふ者は、他の何れの點に於て眞に建設的の事をなしつゝありや聊か疑なきを得ないからである。基督の役者（つかへびと）たる者が、主の祝福し給ひし天國民の標本たる幼兒と沒交渉ならざるべからずといふならば、そは恐らく牧者の資質を發揮せる所以にあらずといふも亦過言ではあるまい、幼童手に手に梭葉を振り翳してホザンナを唱へたりといふ主が入洛の光景は、彼が幼兒を抱いて祝福し給へる溫雅なる態度と思ひ合はされて、理想の牧者たる床しき品格を偲ばしむるものがあるではないか。或は曾て某地の兒童等聖誕節に際し、寒風を冒して東西に驅け廻り、親戚知己の家を訪ねて贈物の金品を得、他日新

島先生の來るを俟つて同志社大學の資金とし贈らんとせしことありしといふが如き、或は某牧師の微笑む顏を見まほしとて一群の兒童背後より之に戲れたりといふが如き、皆あどけなき幼兒に慕はるゝ美はしき人格の佛を偲ばしむるものがある。

論じ來つて吾等は、牧師が日曜學校に對する責任の甚だ重且大にして到底免るべからざるものあるを知ると共に、此事業に參與する事が、彼の牧師としての資質を養ふ上に於て稗益する處また決して鮮少に非ることを信じて疑はない者である。

されば熱誠以て人類教化の大任に當らんとする牧師は、正に其渾身の力を傾注して此事業の發展を期すべきである。少くとも一層の興味と熱心とを喚起せざる可らざる重大の事業である。

（二）次に牧師は日曜學校の經營に關する智識と手腕とをもたねばならぬ。

若し日曜學校を一の機關車に譬ふれば彼は其車も槓桿（レバー）も調整機（レギュレーター）も之を知り且自ら運轉し得る技能を有して、後初めて機關及其運轉士の監督に當り得るのである。之を一の商社に譬へば彼は能く其内部と外務と組織と方法と會計とを知つて後始めて之が支配人たり得るのである。之を一の制度となせば彼は能く其歴史と勢力と目的と設備とを解して之が改善進歩を圖る者でなければならぬ、而してそが學校たる以上、彼は能く其教授力の充實と、常に起り來る缺乏に對し供給の道を講ぜねばならぬ、而も同時に困難多き現在の場合に於ても、尙漸次其發展を促すべき經營の手腕あるを要する。

（三）牧師はまた日曜學校の兒童其ものを知らなければならぬ。

兒童を解せずして其訓育に方り得べからざるは論を俟たぬ、牧師は彼

等の心理と習慣と境遇とを知つて後始めて能く宗教々育事業の監理者たるを得べき者である。而して之は必ずしも兒童心理學や教育學の研鑽を俟つて後知るべき問題ではない、夫に依つて稗益する處あるべきは無論の事なれど、實驗に基ける常識は彼をして能く兒童に對し處すべき道を知らしむるであらう。牧師は兒童を解して後始めて人を天國に導く事を得るであらう。

（四）牧師は日曜學校に關する文學及教授法管理法に關する知識を有たねばならぬ。

之等の問題に關して最も能く研究し得る便宜ある者は牧師であつて、他の教職員に之を望まんは事餘りに多きに過ぐ。故に彼は兒童の讀物教案又は教科書に關する事、及教師の參考書を選定し得る知識を要し、又教授上の秘訣と管理上の注意とを與へ得る程に研究し居らねばならぬ。

一言以て之を掩へば、教會に於ける宗教々育の問題に關して、彼は教會の誰人よりも又彼等全員の知識の總計よりも、以上に能く之を知り居らざる可らずといふのである。

二　資格の修養

更に牧師が單に成人の牧師たるのみならず、同時に天眞なる兒女等が牧師たるべき、最も光榮ある職責を全ふせんとせば、彼は一層其資格の養成に志す處がなければならぬ。

（一）牧師は先づ日曜學校に於ける教師及生徒の輿望を擔ひ且其信任を受くる者でなければならぬ。

彼等と牧師との理想的關係は、徹頭徹尾信任を傾けんことであつて、之は徒らに兒童と教師とに阿諛して、得らるべき事ではない、恰も基督

と幼兒との如く、愛撫と敬慕との相互的同情同感に依てのみ達し得べきものである。爰に至つて彼等は既に牧師の掌中に握られて、唯其意の儘に導かれ、忠告も、監督も、奬勵も、慰安も、始めて可能なるを知るであらう。

而して失望せる生徒は彼に依つて復活し、落魄せる教師は彼に依つて勵まされ、不可解の問題は彼に依つて解釋せらるゝに及び、先の信任は愛に畏敬の念と相結んで、牧師に對する輿望は動かす可らざるものとなる、斯くて牧師は日曜學校の生命の繫がる中心人物となるであらう。

（二）更に牧師は彼等を悅服せしめ得る人格的權威を有たねばならぬ

基督は權威を得んと欲する者が先づ必ず奉仕せざる可らざるを教へ給ふた。牧師の權威も亦愛に存す。能く自己を與へて「人に役はるゝ者」となり、始めて彼等を悅服せしめ得る權威は發揮する、斯かる人格的權威のみ能く牧職の品位を保たしむるものである。悲むべき誤謬は牧師たるが故に權威ありと自任する事である。彼の權威は異邦の有司等の夫と異なり、其職務に附帶する者にあらずして、全く赤裸々なる其人格に存する。教師も生徒も此人格的權威にのみ悅服するを快とすべし。斯くてこそ始めて嚴慈を結べる「天の父の完きが如く全く」なさん爲に、能く靈界の指導者たる任を盡し得べき者である、記せよ、彼は此天父の遣し給へる勅使（キングス、メッセンジャー）たることを、否天よりの使命を齎らせる天使たることを。

（三）牧師は兒童の理解力に應ずる程度の說教をなし得る技能を養はねばならぬ。

日曜學校の聽衆は甚だ沈着せざるが如くにして、實は最も能く印象を受くべきもの、彼等は唯忘れ難き事をのみ記憶する者なれば最も良きものを與ふるか、否らざれば全く與へざるかの二途あるのみである。而し

て其與へ得べき場合に於て、何時如何なる機會に牧師が語るべきかに就ては、決して一定の規則を設けられぬ、唯常に其場合に適合し、また常に新らしく聞かるべき、簡單にして能く考慮を回らせし事實に就て、熱情を罩めて語るを要する。そは屢々彼等に深刻なる印象を與へて、全生涯を通じ決して忘れ難き說敎となるものである。

然れども其說く處は常に變化に富み、彼等の好奇心を滿足せしめ、全く其經驗に應ずる程度のものたるを要し、用語もまた大なる制限を受けねばならぬ。斯かる技能を發揮せんには少くとも五ヶ年の研究と習熟とを豫想すると稱せらる。されど之は單に兒童のみならず、恐らくまた一般聽衆の要求する技能たるを忘れてはならぬ。

三　牧師の責務

既に知識を增進し、特殊の資格を養成して後、餘す處は日曜學校の牧師として自ら如何に處すべきかを考究するにある。吾等は牧師が自身敎授の任に當らずして、牧師として日曜學校に參與せんことを吾等の理想とする、されば今此見地より彼が校內に於ける務と信ずる數點を揭げて見やう。

（一）牧師は常に開校の時以前に出席し居らねばならぬ。

開校前に牧師の顏を見ることは深き意義を含んでゐる、之れ能く彼が其事業に對し有する多大の興味を示し、日曜學校も亦其牧師を有する事を知らしめ、定刻出席の模範を示し、兒童が日曜日を待兼ねて、其或者は朝食も終らずして馳せ參ずる小さき胸に、敬愛する牧師の歡迎を樂ましめ、以て主の日の朝旦、神の言葉を學ばんとて集ひ來る者をば、如何に彼が衷心より歡迎するかを直觀せしめ得るであらう。縱しや開校式に

參與する事もなく無言の儘坐するとも、そは既に大なる感化の源たるは疑ふべき餘地もない、されど眞に興味を感ぜずして、止を得ず職務的に出席するが如きあらば、そは寧ろ出席せざるに過ぐる惡感化の源となるかも知れぬ。

（二）牧師は兒童をして常に敬虔の念を保たしむる目標たらねばならぬ。

兒童が日曜學校に來り、神の言葉を學ぶてふ意識は多く其牧師の敬虔なる態度と容貌と言語とに依つて開發せらるべき事である。斯くて幼時より既に至上者の現前に在りてふ莊嚴なる意識は養はるべきものであつて、他の點に於て縱しや及ばざる處ありとも、日曜學校の敎育は確かに此一點に於て其成効を期せねばならぬ。或は閉校式の間彼は其壇上に座し、或は幼き子等のために祝禱を捧ぐるも亦彼の務の一部であらう。

（三）牧師は個人的に兒童と接觸する機會を見出さなければならぬ。

人格の感化は其接觸に依てのみ可能なる事を知るならば、牧師は兒童の一人々々に就き、能く其顏と姓名とを連絡して記憶し得る迄に相識の間柄となるを要する、一定の時刻に於ては此事甚だ困難である、兒童の家庭訪問と、日曜學校と關連せる特殊の集會とは、彼に逸す可らざる好機會を與ふる。斯くて牧師は彼等の元氣を鼓舞し、彼等の師表となり、能く個人的感化の緣を見出し得るであらう。

（四）牧師は兒童をして常に將來の敎會員たらんとする理想を抱かしめ、且其訓練を與へなければならぬ。

兒童の大望は速に成長して其父兄や敎師の如くならんとするに在る。而るに若し幼き心にも敎會員たるの好ましからざる觀念を抱かしむるが如き事あらば、そは牧師も敎師も父兄も共に訓育を誤りたる者といはね

ばならぬ、此失敗を免れんが爲に、牧師は常に日曜學校と教會との聯絡を考慮せねばならぬ。能く大人をして兒童の模範たり得べき信徒たらしめ得るならば彼等は將來斯の如く牧師を援け、教會の爲に活動せんとの希望に耀くであらう。

而して斯かる期望を現在彼等の境遇に於て實行に現はさしむることは兒童の訓練上缺く可らざる問題であつて、牧師は常に此事を考慮せねばならぬ。於茲か訓育は單に日曜學校に於て教ふる事に依つてのみ其目的を達し得べきものにあらずして、其反面に學びし眞理を活用せしむる機關を設け、其指導を與ふるに至つて全ふせらるべき事は自明の眞理である。吾等は此目的の爲に少年少女共勵會の運用に着眼せんことを必要と認むる者である。

* * * *

吾等は既に餘り多くを論じた、尙牧師が日曜學校に關して考に容るべき詳細の點は多々ありと雖も、そは自ら興味を感ずる者の發見し工風し居らるべきものたるを信じ天下の牧師諸氏に其教を乞はんと欲する。

若し本論の總ての點に於て何等新らしく取るべきものなしとするも、唯一點牧師の日曜學校に關する職責の、重且大なるを明にし得たらんには、吾等の此論をなす趣意も亦達せられたりといふべきである。

日曜學校と公立學校

海老澤亮

一、人格の教育

人格教育の問題が聲高く叫ばれつゝあるに係はらず、學校教育が靈味ある人格を生産する能はざる重なる病源は抑何であらう乎。教育の方針が政變と共に變り、教育てふ永久的事業に携はるものまでが、朝令暮改の訓諭に依つてのみ事を圖り、究めたる原理も學びたる方法も、遂に之を運用し難く、徒に形式の送迎順應に遑なからんとする教育界の現狀は確かに其一因である。而して更に宗教觀の幼稚なる教育家が、常に一種の偏見を以て宗教に對し、形式的宗教と教育制度との分離を曲解して、全然宗教的理想を拔き去り人生の靈味を濾過し去つた無味乾燥なる教育を、企てつゝある事は其第二の原因である。

偶教育上具眼者が、或形に於ける宗教的信念の必要を認め、之を鼓吹せる結果、宗教學上發達の初期に屬し、幼稚なる人類の信仰樣式なるものを捕へ來り、現代の國民に當箝めんとし、無定見なる教育家が、更に之を以て或種の宗教を壓迫する機會となせるが如きは、日本思想界の逆轉として笑を世界に購へる所以であつた。今や教育界覺醒の時期が來たといはねばならぬ。

二、兩者の提携

教育家が宗教的理想を有して總ての教育に方り、不言の間に敬虔の至情を養ふて、靈味ある品格の建設に努力すると共に、宗教家は宗教に於ける教育的理想を發揮して、現代の進歩せる學識に依り人格教育を企て、

常に智識の背後に眞善美を愛し、至聖なる人格的存在者を畏敬する念を與ふるならば、教育と宗教とは實質上に於ける接觸提携が成り立つのである。斯くて相互の理解と同情とを以て國民教育の事に當るならば、國家人民の蒙る恩澤は蓋し思ひ半に過ぐるであらう。更に根本的に之を論ずれば、教育的素養あらまほしく、宗教家に教育的素養あつて、始めて兩者の協働が出來る譯である。

宗教も教育も、要するに人格の問題である。兩者が人格教育を目的とするならばその事業は之に當る人格を通じて始めて行はるべきものであつて、斯かる目的を達成するに、賤劣なる人格を以てして可能なるべき筈はない。兩者の取るべき方法や方針は兎に角として、教育家宗教家の主義と理想と確信とは、兩者の使命如何に係はる問題である。

今一歩を進めて、如何にして教育と宗教とが共働し得べきかを考究せねばならぬ。具體的に之をいへば如何にして公立學校と日曜學校とが、人格教育のために協力し得るであらうか。

公立學校に於て取扱はるゝ教材が、同時に日曜學校に於ても教育の手段となるものであつて、兩者の間に今一層の接近が成り立ち、公立學校の教師は別に個々の宗教々育機關を指して、之を勸奬せずとも、そが兒童に取り如何に有益なるかを知らしめ、寧ろ教會に接近せんことを奬勵する樣な方針を取られん事が肝要である。

日曜學校教師の側に於ても、常に普通教育と宗教々育との併行接觸を圖りその智識の程度に應じて、生徒が週間日に公立學校に於て見聞する處に基づき、その教育を進むる樣心懸け、成し得れば小、中學等その受持生徒の程度に於ける教育を參觀し又は其教科書を參考として絶えず密接なる關係を保たしむる必要がある。

三、公立學校の奬勵

從來兩者間の誤解偏見甚だ多く、公立學校の教師は暗々裡に奬勵する代りに生徒の信教自由にまでも干渉を試み、之が妨害を企つることあり日曜學校教師またその不法を憤つて極力反抗を試み、全く兩者間の關係斷絶する例尠からず、之は大に戒めねばならぬ事である。

公立學校の共勵は必ずしも積極的に行はれ難き場合に於ても、宗教々育機關としての日曜學校に對する敬意を拂はるゝ事に依つて出來るものである。則ち日曜學校の開校時間を公立學校に於て使用せざる事は其一つである、日曜學校の秩序的訓育は屢公立學校の爲に妨げられる、則ち公立學校に於て特に此時間を或種の會合等に用ひ、生徒をして命令的に之に列席せしむるため、日曜學校出席を此上なき樂みとして待ち詫び居る生徒、止むなく之に出席し、爲に日曜學校の組織的訓育が全然破らるゝ事もある、之は宗教々育が如何に重要なるかを解せぬ結果であつて、互に理解の成立つた上は必ず協力讓歩し得べき問題である。

四、完全なる協力

最も完全なる提携協力は信者たる公立學校の教師が悉く日曜學校の當事者とならん事である、之以上に日曜學校教育に取つて好都合なるはない、彼等は天職として常に兒童に接し其智能の啓發に勉め、最も能く兒童を理解し居るべき筈の者であつて、殊に教育上の原理及び應用に關し特別なる準備をなせる者である、若し彼等にして信仰だにあらば彼等は理想的の宗教々育家たるべきである、之は近來漸次行はれつゝある慶すべき現象であつて、週間日に公立學校に於て接觸したる教師と生徒とは

聖日には共に教會學校に於て神聖なる靈育の爲に相會する其事が如何に理想的の方法であらうか。

從來偶斯かる特志家のありし場合にも、校長又は同僚の反感の爲め遂に日曜學校事業に參與し難きに至つた例も尠くはない、又時には毎日兒童を取扱ふ事に厭きて、日曜學校教師たるを好まぬ樣な人もないではない、之等は實に惜みても尙餘りある恨事である。

日曜學校と讃美歌

海老澤　亮

一、情感の教育

日曜學校は一週僅かに一時間を以て能く何事を爲し得るであらうか。換言すれば如何なる點に教育の主眼を置くべきで有うか。余は此問題を思ひ浮ぶる毎に、餘り多方面の要求を爲さんよりは、寧ろ情感の教育に着目するとが切要であると感ぜざるを得ない。無論何處までが情感の教育で、何處迄が智的の教育であるか區劃を立てるとは出來ぬにしても、情感は人の品性に與つて大なる影響を及ぼすものであるは謂ふまでもない。兒童のため最も憂ふべきは美はしき情感の發達をなさしむるに困難を感ずるとである。智識の發達せぬ間は特に原始的な素樸な情が發動す

るもので、感情的に動き居る彼等の情感は、全く感官の奴隷となる。而して極めて利己的で主義的で決して高尚なものとは謂はれない。之を高尚なる樣式に發展せしむることは如何に品性の上に良い結果を齎すことであるうか。

之が爲には清潔な神聖な雰圍氣中に兒童を置くことが最も肝要である。されば日曜學校に於ては「教ふる」といふ普通一般の考よりも寧ろ「養ふ」といふ意味に於て所謂訓育を施すべきであつて、即ち情感の善良なる樣式に於ける發動を繰返さしめ、之が遂に生理的變化を起して、期せずして、高潔な言行を誘起せらるゝ迄に至らねばならぬ。人は決して實利實益のみに生くることは出來ぬものである。守錢奴ならばいざ知らず、普通の人間は趣味の滿足に幸福を感ずるものである。殊に我日本民族の如き詩的の特性を具備して居る者は、趣味の養成をせらるゝ事が即ち將來の幸福を齎らす事であつて、向後益々世の進運に伴れて、稍もすれば無趣味の生活に陷り、乾燥無味な賤劣な生涯に傾かんとするに方り、這般の訓育を要求すること寔に切なるものがある。之は特に日曜學校と讃美歌との關係に就き考究を促す所以である。

二、聖歌の効力

音樂が美はしい情感の養成に有効なること今更特に喋々を要せざる明白な事實である。殊に美はしき聖歌が天眞なる兒女の心の琴線を奏でゝ、妙なる靈樂の共鳴をなす時に其品性上に及ぼす感化は極めて絶大なものである。人間殊に感官の世界に住める兒女等は其造られた儘に律動的生活を營んでゐる。故に音律的衝動には極めて深い感應を示すもの、之れ全く自然の理で音樂唱歌が兒童訓育の中心をなす所以は爰に在る。され

ば敎へんとする眞理は音樂唱歌を通して、不知不識の間に、深く强く兒童等の胸臆に浸潤し往くを常とする。不幸病褥に呻吟して居る兒女が、喜の涙を思はず其眼に浮ぶるものは、何よりも歌を聽く時であつて、之は獨りサンキーの實驗のみならず、余すらも屢々經驗した處である。聖歌の幼き心に與へし印象、其美談に就ては今爰に之を述ぶる遑がない。唯無意識的に誦し居る如き日曜學校の讃美歌に依つて、彼等は深刻なる印象を受け居るものであるとは、疑ふべからざる事實である。最も腕白な一少年の如きも病に罹りし時、其父親に己が痛苦を訴へて、「イエスに話せ」といふ歌があるから、お祈をして下さいと願つた如きは、或意味に於て日曜毎に說かるゝ「お話」よりも寧ろ訓育上聖歌の有力なるとを示すものではあるまいか。

其生理的に兒童の健全なる發育を助長する所以に就ても亦、專門家は必ず多く言ふべき事を有つてゐるであらう。

三、聖歌の地位

斯かる有力な訓育上の利器を、日曜學校に於て從來餘りに重要視されぬ事は最も遺憾とする處である。余は訓育の當事者が今一層此利器を如何に使用すべきかに就き、腐心する處なければならぬと惟ふ。

事實上歌は日曜學校に於ける主要な地位を占めてゐる。其開會式に少くとも二つ、其閉校式にも一つ或は二つを歌はしめ、且其間時に依り練習をなす慣例よりすれば、實際上既に歌の領有する時間は、全課業時間を一時間とするも、其中約廿分乃至卅分に達するのである。

斯くも有効なる利器にして、而も亦事實訓育上主要なる地位を占むるものなるを知らば、今更ながら之を等閑視するの愚を識るであらうと思

ふ。既に之を用ゐ居るからには、教案に對して拂ふ注意と研究とを此方面にも向くる必要あるは、贅言を俟たずして瞭である。

四、聖歌と教師

何れの學校に於ても憂となすは能く讃美歌を教ふる教師其者の缺乏である。熟練せる指導者一人を有すれば其校の元氣と成績とには大に見るべきものがあるに相違ない。然るに此指導者は單に器樂に堪能であるといふ丈けで適任と申す譯には往かぬ。自ら器樂に熟せるや否やは寧ろ第二の問題であつて、先づ有力な音量の多い聲樂家であつて欲しい。而して此指導者を補佐するに一の熟練せる樂手を以てすれば實に理想的の讃美訓育が出來る。指導者は是非とも男子に俟たねばならぬ。樂手は多くの場合女子を煩はすべきものであらう。

斯く專任的の教師を要求すればとて、他の教職員は之を袖手傍觀して居ても構はないといふ譯ではない。全校協力同心以て此重要な事に當らねばならぬ。歌の時に我不關焉と動き廻るか又は他の事に從事し居る教師は、甚だしき惡感化の源をなすことを忘れてならぬ。若し夫れ一つの歌にても生涯忘れぬ迄に教へ得たらんには彼は確かに其兒女の恩人である。歌を教へられた教師は決して忘るゝことが出來ぬとは余が屢々耳にした事實である。

五、聖歌の撰擇

理想的に云へば教案に級別制を必要となすが如く、讃美歌にも級別的撰擇を要する。中等科及び幼稚科の如きは特に別に開校することを有利なりとし、自然各科に適當なる歌を使用し得べきである。

其曲譜は能く兒童の趣味に適せる單純な高尚なもの、其歌詞は能く兒童の理解力に應ぜるものを選定する必要がある。

此點に關て我教界未だ聖歌の發達を見ず、適當と認めらるべきもの甚だ多からざるは眞に遺憾の至りである。歌詞が能く出來居れば日本の兒童には到底歌はれぬ複雜な曲譜が配備されたるあり、單純な子供らしい曲譜に六ヶ敷文章體の歌詞が配備されたりしてゐるものが多い。

また口語體の歌詞は漸次發達し來れるが如く思はるれど、其流弊として餘り過ぐれば下品になり、神聖な感を伴はぬ樣な弊に陷り易い事もある。兎に角讃美音樂界には尙研究の餘地がある。聖誕節や花の集會等のため特に準備せらるべき歌に關して、多くは其期節の終ると共に次年まで埋沒さるゝ習であるが、實際は用濟となつた後に之を繰返し使用する事が却て其眞意を傳ふるに有効である。其期節前準備の間には教師も生徒も共に餘りに練習にのみ熱心にして、歌の眞意が稍もすれば閑却される。併し終つて後には漸次其注意が歌詞の方に集注されるに至る者である。

其他春秋等の季節に依り、之に適はしき歌を選擇する心掛も必要である。

六、聖歌の發達

一面聖歌の利用に關し研究を促さんが爲に數項の暗示を與ふると共に、余は一面斯くも有効なる利器其物の進步發達上、之が創作に留意せらるゝ信仰の友の多からんことを望まざるを得ない。信仰の歌は信仰家を俟つて始めて歌はるべきものであつて、現行「さんびか」の如きも其作者は大多數牧師或は信徒の作に係るものである。決して文學者を煩はしたものではない。殊に日曜學校の讃美歌の如きは、信仰の餘賦、其流

露として、兒童の友とし日を送りつゝある人々により作らるべきものである。日曜學校教師にして聖歌の作者たる光榮を擔ふ者はなきや、兒童に興味なき專門家の作が、如何に文學的に善美なりとも、日曜學校用としては其効あるを期すべくもない。前にも云へる如く我邦讃美音樂界、殊に日曜學校用讃美歌の發達のためには、大に研究を値する餘地の存することを述べて置きたい。

七、聖歌の善用

宗教的訓育上斯くも主要なる地位を占め、斯くも有効な職能を有する讃美歌に對して教師が教科書に對し有すると同樣の興味を感ずるに至らんことは、余が此論をなす目的である。稍もすれば女兒は聖歌に興味を有すれど、男兒の多くは無頓着なりと觀察する者もある、之は現今の狀態に於ては或は事實であらう。併し其理由は聖歌に注意を拂ふ教師なき爲であるといふも過言ではあるまい。

若し充分の興味を以て之を教へ尙且嫌ふ者ありとせば、之は國民としての欠陷を暴露したものである。父兄が趣味の教育に欠けたる惡感化の結果である。其事既に趣味の養成上之を利用すべきを促すものといはねばならぬ。

現今堂々たる地位ある者にして國歌をすら歌ひ得ぬ者が多い樣な有樣ではないか。また現今小學校に於ける音樂唱歌の極めて不自然な不完全なものたるは否むべくもない。

日曜學校に於ては少くとも此方面に於て、美はしき品格の建設に貢獻せしむべき使命がある。將來の國民、將來の信徒の養成上讃美歌の善用に俟つべきものあるは最早否む可らざる處である。

日曜學校と家庭

海老澤亮

兩者は一兒童の宗教々育上極めて密接なる關係を有し、相互の興味と共働とは兩者の職能を徹底せしむる所以である、今や心ある人々は爰に思ひを潛めて兩者は彌接近してきた。

「家庭は第一の最も神聖なる學校である」とは、家庭に於ける教育的理想の原理を示す語である、家庭をして日曜學校の理想を應用せしむるは兩者聯絡の第一歩であり、而も之は屢家庭が日曜學校より受くる感化に俟つべき事である。

(一) 日曜學校の家庭に及ぼす感化

日曜學校に學ぶ少年少女は其美はしき心に受けし印象と、或は無意識的に記憶せる聖語とを以て、各々其家路につく時に、恰も福音の天使たるやの觀がある、或家庭に取つては之が神の光明を反照する唯一の機會である、曾て青年時代に教會に出席せし男女が新しき社會生活に入るに及んで遂に其良習慣は打破せられ、久しく其門をくゞる事なきに至りし者も、一と度其家庭に、祝福の天使が呱々の聲を擧ぐるに及んでは、遉に親たるの自覺と共に宗教的覺醒を促され兩親の心中自ら神の光が輝き來るを常とする、更に蝶の如く花の如き幼兒が日曜學校より歸り來つて其罪なき唇より神の聲を聽くに及んで、世の雜務に忙殺せられつゝある兩親も亦大なる教訓を受くる事が出來る、斯くて幾多の父は禁酒し、幾多の母は教會に導かるゝ、神は幼兒乳兒の口に眞理の言を置き給ふ、老衰最早會堂に詣づる能はざる祖父母も頑是なき口より天使の告示を受け、病褥に臥す姉妹も亦大なる說教を聽く、日曜學校の閉校後其家をさ

して歸り往く兒女等は、恰も花粉を薄絹の羽に乘せて運ぶ蝶の如く、家庭に往いて其果を結ばしむる使命を擔ふ者となる、家庭が日曜學校と共働を要する所以は實に明瞭である。

(二) 家庭の日曜學校に對する後援

日曜學校も亦其教育を有効ならしめんが爲には、家庭の理解と同情と協力とを期待せねばならぬ、一週僅かに一時間を以て如何に有効なる教育が出來、敬虔なる空氣を鼓吹し得るにしても、其大部分の時を過す家庭に於て、之を破壞するに於ては、到底其目的を達する事は出來ぬ、之れ特に家庭側に於ける共働を要請する所以であつて先づ左の數項を列擧したい。

學課の應用

日曜學校にて教へられた教課は之を週間日に於て家庭生活に應用せられん事は教育上望ましき處である、實際教育は應用を尊ぶものであるが日曜の朝僅に一時間に於て應用まで實施せしむるは到底不可能である、之に於てか家庭教育の主腦者が日曜學校に於て教へられたる原理に基づき、之を一週間或は復習せしめ或は實施せしめ得るに至つたならば、日曜學校教育の効果如何を疑ふ樣な事は無くなるであらう。家庭に於ては其兒女が一日曜に教へられたる教課を知り、事毎に之を實際生活に應用せしむるやう心懸け以て其働きの實を擧げられたい、之が爲には其受持教師と聯繫を取り、同じ教案を以て互に教育に協力するを要する、現時多くの母親の如くに日曜學校に於て如何なる教育をなしつゝあるかを知らずに漫然其子女を之に追ひやる丈けであつては充分の効果なき素より其所である。家庭の側に於て常に教師が教育上要求する處を聽取し之を實行する丈けの熱心がなければならぬ斯くて日曜學校教育は家庭にまで

も延長せらるゝ所以である。

出席奬勵

家庭が日曜學校を後援する次の一大勢力は其兒童の出席を奬勵する事である、日曜學校に於ける一の憂ひは、如何に組織的訓育を企つるも生徒の出缺常ならざるため其目的を達成し難き事である、家庭の側に於ける僅少の注意を以て、或場合には日曜を忘れんとする兒女等を督勵出席せしむる事が出來るであらう、而るに日曜學校に同情なき家庭は却て屢々兒女等の希望をも打消して、彼等を他の遊山の爲に同伴する事すらある、苟くも其子女の品格建設てふ重大なる問題を眼前に控えて日曜學校を暗るならば、斯かる輕卒の擧を戒めねばならぬ。現在日曜學校出席兒童を見るに。信徒の子女よりも寧ろ會員外の家庭より來校する者比較的に多數であるといふ、之は極めて奇妙な現象である、基督教々育に關

する理想が信徒の家庭に徹底せぬ事を表示する所以であらう、斯くて其子女等が成人して教會を離るゝに及び急に狼狽するに至つては思はざるの甚だしきものではないか、家庭は成し得る限り兒女をして日曜學校出席の習慣を養はしむべきである。余は此奬勵の爲に各日曜學校に勸めたいのは

會員子女名簿

を調査作成せん事である、以て會員の家庭に於ける丁年未滿「夫以上のものは牧師と教會とに一任するとして」の子女を悉く調査して登錄し、此名簿を日曜學校に備へて、出席奬勵の法を講ずるやうに致したいと思ふ、各日曜學校は少くとも夫等の兒女の教育に對しては責任を負はねばならぬ、各教師は其子女等の中出席せざる者を訪ねて誘致せん事に努めたならば必ず効果を收め得るであらう。而して此教育に洩れんとする全國幾

萬の子女を羅致する事となるであらう。之は早速實行し得べき事として敢て各日曜學校當事者に勸める。

(三) 兩者聯絡に對する補助機關

兩者の聯絡を取るべき方法に關しては通信と訪問と會合とを敎へねばならぬ、通信箋の使用は自己の非行を通報せらるゝの惧ある者に取つては、好ましからぬものとせられ又、或父兄は之に由りて其子女の敎會學校出席を知つて之を拒むに至る者もあらう、されど夫等少數の犧牲を拂ふても、兩者の聯絡上なかるべからざる事である、又生徒の最も重い一年間の學校の事業成績等は、印刷物に由つて家庭に報ずる事を要する。

次に訪問は敎師の家庭訪問と父兄の學校參觀との兩法である、病める生徒を訪ふ敎師、誕辰に招かるゝ敎師等が訓育上身を以て運ぶ感化は大なるものがある、又父兄は日曜學校に於て平素如何なる敎育をなしつゝ

あるかを實際參觀すべきである、單に祝祭日のみの日曜學校を解するは、大なる不覺である。

終りに會合は生徒會、保護者會等樣々なる種類のものを適當なる機會に開催すべく、家庭と學校との要求を互に語り合ひ、殊に一兒童の個性の敎育の爲に親しく保護者と敎師と協議をなすべき機會を多からしめねばならぬ、之を通じて一は親睦を圖り他は父兄の敎育上の思想を啓發せしむるため相當なる講話を聽かしむるも亦有効である。敎師は又其家庭に時々受持生徒を招待し、或は共に散步遠足等を企て自らなる感化敎育をなすべき便宜を得なければならぬ。

要するに兩者の提携聯絡が遺憾なく行はるゝに至らば、兩者は理想の實現を期する事が出來、其祝福は生徒の全生涯に及び、他日聖き宗敎生活の樂しき思ひ出により、如何に感謝する事となるべきかは、蓋し思ひ

半に過ぐるものがあらう、此兩機關は神の榮のため一層共働の實を擧げねばならぬ。

大正七年七月二十日印刷
大正七年七月廿二日發行

定價十五錢 稅二錢

著作者 札幌區大通西一丁目 海老澤亮
發行者 東京市神田區美土代町二丁目青年會館內 川澄明敏
印刷者 東京市京橋區銀座四丁目一番地 村岡敏三
印刷所 東京市京橋區銀座四丁目一番地 福音印刷株式會社
發行所 東京市神田區美土代町二丁目青年會館內 日本日曜學校協會本部
振替東京一八〇〇四

不許複製

325
394

文學士講話 柳原貞次郎君著

兒童心理 再版發行

▲定價廿五錢 稅貳錢

本書は柳原文學士がもと日曜學校教師講習會にて講演せられしものを同氏の承認を得て本協會日曜學校叢書第一篇として出版せるものなり、日曜學校教師用兒童心理學として最も好評あり

キリスト一代記 縮圖 石版四度刷 頗鮮明

▲定價 壹枚 拾五錢 郵稅貳錢

（振替にて注文は料金一錢增の事）

キリスト一代の重なる事跡と時期とを一見明瞭ならしむ、日曜學校各教室には一葉つゝ掲げおく必要あり。

月刊雜誌 日曜學校

毎月十五日發行

▲一ヶ年稅共壹圓廿錢

□毎號豐富なる記事、充實せる講演、研究を掲載す。

□日曜學校に關する知識の寶庫にして教師の好伴侶なり。

□新進の指導者にして教授法又は教材を供給す。

□內外に於ける日曜學校の動靜を報道す。

□宗教々育は刻下の緊急問題にして教會も家庭も學校も之に注意せざるべからず、而して本誌は其先覺者なり。

□地方にありて斯道研究の便を缺く人々の爲に本誌は最も良き參考書なり。

發行所 日本日曜學校協會本部

神田區美土代町青年會館內

振替東京一八〇〇

終